

1960年代と「ベ平連」

松井, 隆志 / Matui, Takasi

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

697

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2016-11-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013468>

1960年代と「ベ平連」

松井 隆志

- 1 なぜ「1960年代」か
- 2 ベ平連の3つの源流
- 3 「市民運動」の歴史的位位置

1 なぜ「1960年代」か

本稿は、ベトナム反戦の運動体として知られる「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合⁽¹⁾）の考察を主題とする。

ベ平連は、運動の自発性を尊重する「この指とまれ」の3原則⁽²⁾など、ユニークな運動論とその実践で注目されてきた。「組織ではなく運動」であると称し、成員を確定する規約等を持たず、ベトナム戦争反対をテーマとしていれば自由に「ベ平連」を名乗ることができた。運動の最盛期には300以上の各地域や学校等で「〇〇ベ平連」が誕生したとされる。そのため、そうした全国各地のベ平連の動向こそ研究する必要があるとの指摘もある（平井2005：725）。しかし本稿は、東京で最初に「ベ平連」として誕生した、いわゆる「神楽坂ベ平連」⁽³⁾を考察の対象とする。なぜなら、この「神楽坂ベ平連」は、多くの文献・資料等が残され、研究も少なくない⁽⁴⁾とはいえ、いまだに歴史的に十分位置づけられていないように思われるからだ。

たとえばベ平連（以下、「神楽坂ベ平連」のことを単にベ平連と表記する）は、「市民」を称する運動の始まりとして位置づけられることがある（天野1996）。確かに、「市民運動」であることはベ平連が自他ともに認めることであった。だが、そもそも「市民運動」とは歴史的に見て、特にグローバルな比較において、何だったのかということが、これまであまり問題にされてこなかったよ

(1) 1965年の発足時は「市民文化団体連合」であったが、翌年「市民連合」に変わった。なお、本稿英文タイトルの「The Japan “Peace for Vietnam！” Committee」という英訳は、かれらの自称を採用した。

(2) 「言い出した人間がする」、「人のやることにとやかく文句を言わない」、「好きなことは何でもやれ」の3つである（吉川1991：145-6）。これは、集団のダイナミズムをできるだけ損なわずにエネルギーに変える工夫として、優れたルールであるように思われる（松井2014：211）。

(3) 全国各地のベ平連と区別するため、事務所があった場所にちなんでつけられた通称。

(4) 2000年代以降のものでいえば、道場親信（2005）や小熊英二（2009）の著書が、ベ平連に多くのページを割いている。ただし、これまでの研究は、本稿が後に述べるベ平連の「3つの源流」に十分留意してこなかった。

うに思われる。あるいは、「市民運動」の始まりは本来ベ平連ではなく、1960年の安保闘争を機に始まった「声なき声の会」であった。「声なき声の会」はまた、ベ平連の主要な「母体」でもあった。では、「声なき声の会」とベ平連とは、同じ「市民運動」だったと言えるのだろうか。

ベ平連を論ずる文献の多くが、その運動論的にユニークな特徴に注目する一方で、ベ平連あるいは「市民運動」の既成イメージを自明視するあまり、こうした基本的な検討を軽視してきたと本稿は考える。こうした点で、前述の本稿の問題設定はいまだ成立の余地があると言える。

本稿は、ベ平連についての検討を行うが、特に前記のような歴史的な位置づけを主題としたい。ところで、そうであるならば、本特集のテーマが「1968年」の運動として設定されていることが気にかかる。端的に言えば、この時期の日本の社会運動の高揚を「1968年」で表象することに本稿は違和感を持つ。

なるほど、日本においても1968年は、大きな動きだけでも、たとえば佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争や10.21国際反戦デー(新宿騒乱)があり、同時進行で日大・東大の全共闘運動があるなど、高揚の一つの山であったとは言える。しかし、ベ平連に即して言えば、米紙への新聞広告運動(1965-6年)や日米市民会議(1966年)、脱走兵援助活動開始(1967年以降)と、68年以前とだけ比べても、「1968年」を特記すべき理由は特になく見える。

そもそも先に挙げた「1968年」の学生を中心とした諸闘争についても、なぜそれらに歴史上の特権的地位を与える必要があるのか。衝突の華々しさこそ社会運動の意義だと自明視するのでなければ、「1968年」を代名詞として採用する理由について、本来十分な説明が必要ははずだ。この点の議論を曖昧にしたまま、他地域での用法を安易に日本に適用しているように思える⁽⁵⁾。

確かに、「1968年」はグローバルな同時代性を示すのに便利な記号だ。しかし、実際には高揚も数年の幅を持って生じている。したがって現象面のみに着目するとしても、正確には「1960年代後半」と言うべきものだろう。ベ平連もちょうど1965年に始まっている。

だが本稿は、「1968年」でも「1960年代後半」でもなく、日本の社会運動の高揚を「1960年代」の問題として対象化したい。

なぜ「1960年代」なのか。1つには、60年代後半の高揚の由来を考えたいからだ。単に「前史」として60年代前半が求められるだけではなく、構造的背景としても60年代全体が問題となってくる。『1968』と題された著作で、ジャーナリストのマーク・カーランスキーは以下のように述べている。

1968年という年を築きあげた歴史的要素は4つあった。1つ目は公民権運動である。当時では非常に斬新で独創的な運動だった。2つ目は、独自の感覚や疎外感に溢れ、いかなる権力も受け入れなかった世代の存在である。3つ目はひとつの戦争である。この戦争は世界じゅうのまさに至るところから反発を浴び、すべての反体制派にとっての大義名分となった。4つ目は、

(5) 最近の「1968年」を冠した研究書でも、本文中では何の留保もなく「1968年」と「1960年代」が言い換えられている(梅崎・西田編2015)。この後で議論しているように、「1968年」に焦点化することと、「1960年代」の問題として歴史化することでは、かなりの距離がある。

これらのあらゆる出来事が、テレビ時代を迎えようとしていた、まさにその時に起きたということである。とはいえ、当時のテレビは世に出てから時間は経っていたが、まだまだ管理されおらず洗練度もまとまりも今日ほどにはなっていなかった。(Kurlansky 2004 = 2008a : 13-4)

「公民権運動」という米国視点の指摘を別にすれば、日本にも当てはめることが可能だ。すなわち、引用文中の2つ目は団塊世代、3つ目は同じベトナム戦争、4つ目はこれもそのままテレビ時代である。こう見てくると、2点目の団塊世代が成人し、進学率が上昇する中で大学生となる（そして都市部に集まる）のも、3点目のベトナム戦争の激化（1965年の北爆以降）も、なるほど1960年代後半と言える。

しかし日本におけるテレビについて言えば、1959年のミッチー・ブーム（皇太子成婚）の辺りで普及率は上昇しており、そもそも若者の都市部への移動や進学率の上昇も、全体としては高度成長の産物と言える（吉川洋 1997）。その高度成長は1955年には始まっており、カーランスキーの言う「1968年という年を築きあげた歴史的要素」は、1960年代全体の幅で見ると言えるだろう。

また、1点目の「公民権運動」を一般的に言い換えるならば、それは「1968年」の高揚に先行する、その源泉となる運動の存在を意味するだろう。先に挙げた日本の1968年の突出した学生運動は、その重要な起源を60年安保闘争における「安保全学連」に求めることができる。またベ平連も、その起源の1つは、60年安保闘争で始まった「声なき声の会」だった。

このように考えれば、1960年代後半の高揚を捉えるためにも、「1960年代」の問題として掴むことが必要ということになるだろう。

さらに、ここに日本独自の条件が加わる。先にも触れた「安保」の問題だ。高揚を成立させた闘争課題の1つが「ベトナム反戦」（ベ平連はまさにこれを主要テーマにしていた）であったが、日本社会においてベトナム戦争が問題になったのは、日米安保体制における日本政府の対米全面協力のゆえでもあった。この時代の（今にも至る）安保条約が成立したのが、1960年だった。その条約承認をめぐる取り組みられたのが、先に述べた60年安保闘争である。この安保条約の「改定」（新条約への置き換え）へと至ったのは、日米の各種政治力学の結果であり（原 1991 など）、その時期がちょうど1960年になったのは、基本的には偶然と言って良い。一方で、その新安保条約は10年間の効力しか保障しておらず、1960年から10年後の「70年安保」を期待させるものだった。つまり、「1960年代」とは、ちょうど2つの安保闘争に挟まれた、「安保の時代」でもあった。このことは、グローバルな「1960年代」の同時性とは異なる、日本における歴史の偶然に過ぎない。しかし、日本の社会運動を捉える際には欠くことのできない要素ではあろう。

以上の理由から、本稿は、「1968年」を含む運動の高揚を「1960年代」の問題として捉えたい。そして、「1960年代」にベ平連をどう位置づけるかを問うだけでなく、逆に、ベ平連という具体的対象の分析を通して、「1960年代」をどのように再構成すべきかという問いにも挑戦したい。これが本稿の問題意識である。

2 ベ平連の3つの源流

「1960年代」の問題としてのベ平連にどのようにアプローチするか。まずはその「起源」を探ってみることから始めよう。

ベ平連は1965年4月に始まった。4月24日に東京で「ベトナムに平和を！」のデモが呼びかけられ、デモ後にその参加者たちによってベ平連が発足した。そして、デモを呼びかけた1人であった作家・小田実が「代表」(ベ平連唯一の「役職」⁽⁶⁾)に就いた。

「市民運動」としてのベ平連というイメージからすると、小田を含む「市民」個々人が自発的に参集し、全く新しい運動が始まったようにも思える。しかし、現実それほど単純ではない。実際の歴史は必ず、何かしら過去を引きずる形で展開する。また「市民」も、無色透明の個人ではあり得ない。

たとえば、よく知られたエピソードであるが、小田がデモを呼びかける1人となるのは、哲学者・鶴見俊輔が声をかけたことに始まる。その鶴見もまた、政治学者・高島通敏などとのやりとりの中でこの下準備を行っていた。

1965年の3月、文藝春秋の画廊で富士正晴の絵の展覧会が1週間ひらかれた。……その最後の日に高島通敏が来て、米国の北ヴェトナム爆撃に抗議する運動を起こそうと提案した。高島は、声なき声の会の事務連絡の中心にいる人物である。／……声なき声 [の会] から、他のおなじような小さい会にしらせて、北爆反対のデモの相談の会をひらこうということになった。／ベ平連の創立当時の名前が「ベトナムに平和を——市民文化団体連合」という、その後のベ平連の活動から見るとそぐわない感じがするのは、こういう成立の歴史の痕跡による。／4月はじめに本郷学士会館で相談会をひらき、5年前の安保反対運動の時よりも若い世代から指導者を求めようということに意見が一致した。というのは、みな相当にくたびれていて、自分たちよりも若い人から指導されたいという希望をもっていたからだ。……／そこで、小田実にたのんでみて、彼が承知したら呼びかけ人になってもらい、さらに若い人への輪をひろげようということになった。(鶴見1974: XI 原文強調省略)

小田自身の表現を借りるならば、小田は、鶴見や高島の「策謀」に乗せられた「人寄せパンダ」だった(小田1995: 24)。

ところで、この下準備は、鶴見や高島らの「市民」の間でだけなされたものでもなかった。自身もその一員であった武藤一羊の証言によれば、1965年当時、共産党中央への「反対派」であった元共産党員たちが、それなりに広がりのある運動の「文化圏」を形成しており、ベ平連の始まる直前に独自にベトナム反戦運動を準備し始めていたという。そこに鶴見俊輔らの動きが伝わり、「新

(6) ベ平連に「代表」はいたが、権限等は特に規定されていなかった。なお、後に言及する「事務局長」といった役職はあくまで通称であり、公式のものではなかった。

しい動きに合流して一緒にやりましょう」ということになった（武藤 2009：138-9）。

小田実自身、ベ平連について次のように述べている。この指摘はこれまでの研究ではあまり言及されてこなかったが、ベ平連の歴史的な位置づけを考える際に、重要な問題を提起していると本稿は考える。

私がなぜこの当時としてはかなりはなやか、にぎやかな人間のつながりのことを少しくわしく書いたのかというと、この輪が鶴見さんや高島さんのような、あるいは「声なき声の会」のような、私が彼らのことをいつもからかって呼んでいた言い方を使って言えば「マジメ市民」のつながりとともに、そしてまた、明確に「左」のイデオロギーを持った、これもまた私のカラカイの言い方で言えば「政治集団」とともに、3者がからみあいこんがらがりながら「ベ平連」の運動の形成を始めていたからだ。私のカラカイの言い方を今少しづつづけて言うなら、この私やら中古、格安のキャデラックの持ち主〔久保圭之介〕らを中心としてかたちづくられた人間の輪はさしずめ「インチキ市民」の輪ということになるが、「マジメ市民」「政治集団」「インチキ市民」、この3者がおたがいが異和感、戸迷い、ウンザリを感じあいながら、ただ1点、それこそ「ベトナムに平和を！」の志でつながって動き出したのが「ベ平連」の運動だった。（小田 1995：34-5）

小田によれば、ベ平連は「マジメ市民」、「インチキ市民」、「政治集団」の3つの潮流によって形成されていた⁽⁷⁾。「マジメ市民」は、先に触れた鶴見俊輔や高島通敏に代表される「声なき声の会」の流れである。「声なき声の会」はベ平連発足時の呼びかけ団体の中心であり、ベ平連の直接的な源流であった。しかし、ベ平連の「市民運動」は、「マジメ市民」によるものだけではなかった。小田が言うところの「インチキ市民」もいた。すなわち小田自身や、中古のキャデラックをデモの先導車としてしまった映画プロデューサー・久保圭之介（初代「事務局長」）、自らが招いた問題でNHKをクビになり「失業者代表」と集会で挨拶し顰蹙を買った小中陽太郎など、先の引用の言葉で言えば、「はなやか、にぎやかな」文化人や周辺の業界人たちも、「市民」として参加していた。そして3つ目の「政治集団」は、マルクス主義に依拠する組織活動家たちで、後の共産主義労働者党（共労党）に合流するいいだもも、栗原幸夫、武藤一羊、吉川勇一らのことを指していた。

ベ平連をこうした3つの潮流に分けて捉えること自体、単純な「市民運動」としてのベ平連像を揺るがすが、特に「政治集団」の存在は、興味深い問題を提起する。なぜなら、共労党という政治党派を中心部に抱えた運動体は、果たして「市民運動」なのか、という疑問を生じさせるからだ。

(7) この当事者認識がいつから普及していたかは確かめられていないが、1973年の小中陽太郎の著書にも次のような記述がある。

「よく指摘されるように、ベ平連には、その起源において三つの流れがあり、それを星雲のように自発的市民の流れがくるんだ。／『思想の科学』や『声なき声』を中心とする日常生活重視の地域運動タイプ、それに小田氏を中心とする国際的関心とジャーナリスティックな傾向をもつ集団、それから、武藤一羊氏や吉川勇一氏らのように、世界観の問題、というか、歴史を貫いて流れる普遍的なるものへの憧憬と、歴史の中にあることのさわやかさを人生の礎に置く人々である。」（小中 1973：18）

ただし、ベ平連に「政治集団」が中心的に関わっていたことは、当時から公然の事実であったし、先の引用の通り、当事者たちも隠そうとしていない。「政治集団」の1人でありつつ、ベ平連の「事務局長」として文字通り中心的に関わった吉川勇一も、日本のベトナム反戦運動を研究した『海の向こうの火事』(Havens 1987=1990)の記者解説において、1990年の時点で次のように書いている。

…… [本書の] 著者が、ベ平連など反戦市民運動を、反戦青年委員会、全共闘、あるいは新左翼諸党派と相対的に区別した勢力として論じているのは妥当だと思うのだが、しかし本書の評価では、その間を切り離しすぎているように私には思える。ベ平連自身の中にも、いいだ・もも、武藤一羊氏をはじめ、ラディカルな新左翼系マルクス主義者が参加していたのであって、それらの人びとのベ平連運動の中で果たした役割も、プラス、マイナスを含めて、論じられるべきだっただろう。しかし、この最後の問題点などは、アメリカの研究者に注文をつけるよりは、まず日本の運動当事者がしかるべき評価の作業をしなければならぬことである。(吉川 1990: 413)

したがって、本稿は「政治集団」(共労党)がベ平連に深く関わっていたこと自体を、新たな論点とはみなさない。また、この点に関して、ベ平連を「市民運動」と呼ぶべきかどうかという定義問題や、あるいはそれが「市民運動」としてふさわしかったのかどうか、という評価を本稿で行いたいとは思わない。ベ平連が定義上「市民運動」ではないというなら、それで構わない。本稿はむしろ、こうした「政治集団」が、いかに「市民運動」ベ平連の一角をなしたのかという歴史と、かれらが「市民運動」に与えた影響をこそ考えたい。

実はこの問いは、「政治集団」にのみ適用されるものではない。「市民運動」という既成イメージの自明視をやめれば、「マジメ市民」と「インチキ市民」にもぶつけられるべき問いのはずだ。したがって、話を戻して、この3つの集団に即して、ベ平連の源流を探ってみよう。

①「マジメ市民」

「市民運動」の語や、その担い手としての「市民」という理念は、1960年前後まで一般的ではなかった(高島 2004: 28)。警職法闘争(1958年)から60年安保闘争へという運動の流れの中で、「市民運動/市民」というまとまりとして、この頃に成立した概念だった。

「マジメ市民」を代表するのみならず、「市民運動」の代名詞とも言うべき「声なき声の会」は、60年安保闘争のときに生まれた。会が始まったエピソードは有名である。1960年6月4日の統一行動に「誰でも入れる“声なき声”の会」のノボリを持って2人で歩き始めたデモに、沿道から次々と参加者が加わり、終着地点に着く頃には300人にもなっていた。そのためこのまま解散するのはもったいないと、連絡をとりあうことを約束し、後日集まって発足した(小林 1960: 108)。

この直後、「声なき声の会」とも縁の深い思想の科学研究会が、60年安保闘争に関して『思想の科学』1960年7月号で「市民としての抵抗」を特集し、それによって「声なき声の会」を「市民」の典型例として定着させた。

誕生した「市民運動」における「市民」とは何だったのかという問題は、既に論じたことがあり(松井 2009b), 本稿では深入りしない。結論的に言えば、「無党無派」という言い方に集約されるような、労働運動や学生運動、あるいは社会党・共産党の活動家ではないという意味での、「その他」であるということが、「市民」概念の中心にあった。他に入れるデモがないため次々に「声なき声の会」のデモに集まってくるという先に紹介したエピソードも、「その他」のあり方を象徴している。

この「その他」を、もう少し肯定的に言い直せば、60年安保闘争を機に提起されるようになった既成政治勢力からの「自立」(吉本隆明)の動きの1つだったとも言えよう。特に、60年安保闘争時の結成直後の熱気が去る中で、それでも「市民」として運動を続けようと努力し続ける姿は、「自立」というにふさわしい厳しさを強さを持っていた。

たとえば、1961年10月22日の政治暴力防止法案(政防法)に反対する「声なき声の会」のデモは、雨の中、歩行者も少ないコースに変更されて、少人数で行われた。

濡れねずみのデモは終わった。それは存在した。存在することが、すべてだった。私たちの行為の最終目標はそれだった。私たちは30人の歩みによって政防法案を否んだ。これは将来への一つの核の用意に他ならなかった。いわば私たちは種をまいたのだ。(声なき声の会編 1962: 125)

小田実は、こうした「マジメ市民」のマジメさを、「市民イデオロギーとしての堅さ」があり、『マジメ市民』の場合、その『自発』はあくまで考え抜かれた、千万人といえどもわれ行かん式の覚悟を決めた、それをどこかに秘めた『自発』だった」と評した(小田 1995: 247)。

② 「インチキ市民」

「マジメ市民」の「自発」に比べると、「インチキ市民」の「それは多分に酔っ払い的、いいかげんな『自発』だった」と小田は続ける。しかしその「いいかげんさ」によって、「気安さ、気楽さ」が生まれ、「それまでの運動になかったひろがり、多種多様性をあたえたように思う」と書く(小田 1995: 248)。この「インチキ市民」の由来を、次に探してみよう。

「インチキ市民」の代表は、まず小田実自身だ。ベ平連以後の小田のイメージからすると想像し難いが、新しい反戦運動を呼びかけるにふさわしい存在だとは当時必ずしも思われていなかった⁽⁸⁾。小田自身の証言によれば、ベ平連以前のデモ参加は「たぶんだ一度きり」で、60年安保闘争時も帰国直後で「まったく参加していない」(小田 1995: 246)。

小田の存在は、何より、世界一周貧乏旅行とその体験記である『何でも見てやろう』のベストセラーを通じて知られた。たとえば、ベ平連に参加した阿奈井文彦は、1961年頃のNHKのテレビクイズ番組「私の秘密」に小田が登場したエピソードを記憶している(阿奈井 2000: 98)。

(8) 吉川勇一は、『何でも見てやろう』(1961年)の読後感として、小田を「日本のネオナショナリズムのリーダーになりかねぬ人物かも知れない」と危惧し、むしろ当時は石原慎太郎に期待を持っていたと述べている(吉川 1991: 99-100)。また小田自身も、『何でも見てやろう』の講談社文庫版に収録された1971年の「あとがき3」では、『何でも見てやろう』評として、「あいつは歩き回っているだけだよ。あんな本に思想などあるものか」という「インテリたち」の雑談をたまたま耳にしたと書いている(小田 1979: 449)。

もちろん当時既に小田は「作家」でもあり、小田作品のドラマ化や映画化を意図して、NHKディレクターだった小中陽太郎や映画プロデューサーの久保圭之介といった「業界人」も小田の周囲に集まっていた。当時まだ一般的ではなかった自家用車（しかも中古のキャデラック）を乗り回し「深夜ドライブに出かけてうまい物を食っていた」（小田1995：247）のも、この「インチキ市民」の人脈だった。かれらが映画・テレビという当時の花形娯楽産業の関係者であったことは、その後の社会運動のイメージから見れば隔世の感がある（⁹）。

また、この「インチキ市民」には、芥川賞作家・開高健¹⁰をはじめとする作家たちも多く含まれている。それら執筆者の原稿が掲載される雑誌自体が、ベ平連人脈の裾野を形成していた。たとえばベ平連と同年開始の『話の特集』では、小田や開高の他、久野収や鶴見俊輔、小松左京、小中陽太郎らベ平連関係者がしばしば執筆者として登場するとともに、同誌の和田誠や横尾忠則といった、「アート」関係の人脈にもつながっていった（矢崎2005, 2014）。

こうした「インチキ市民」＝「文化人」・「業界人」の存在は、ベ平連の影響力拡大に貢献したと思われる。かれらがなじみのメディアを利用してベ平連の情報を広めたというだけでなく、ベ平連がデモや集会を呼びかけるとき、こうした有名人を見たいという「ミーハー」気分の参加者が一定数含まれることになったことは否めないだろう。もちろん、気楽さ・気安さに由来する運動参加者の「多種多様性」の実現も、小田の指摘する通りだ。

ちなみに、かれらやその周辺人脈の職業、あるいは「深夜ドライブ」といった振る舞い方を見ても、マスメディアの発達・隆盛や「豊かな社会」の実現といった、高度成長という時代背景を強く感じさせる。おそらく1960年代以前に「インチキ市民」が登場することは難しかったに違いない。「インチキ市民」も、いわば60年代の子であった。

③「政治集団」

「マジメ／インチキ」の2つの「市民」に合流した第3の流れが「政治集団」、具体的には1966年以降共産党に参加するマルクス主義者たちだった。ところでなぜ共産党だったのか。かれらはどのような人たちだったのか。ベ平連の源流の最後として、これをとりあげたい。

実は、「市民運動」へと合流したマルクス主義者たちの流れを明確に浮かび上がらせるためには、既存の「新左翼」概念の再検討が必要になると本稿は考えている。

「新左翼」とは、現在の理解では、1950年代後半に共産党を批判して自らの革命組織を立ち上げた政治党派、すなわち革共同（革命的共産主義者同盟）あるいはブント（共産主義者同盟）、およ

(9) ちなみにテレビは、この時代いまだ急成長途上のメディアだった。先のカーランスキーの「まだまだ管理されておらず洗練度もまともも今日ほどにはなっていない」という表現は日本においても当てはまるだろう。1960年代の「テレビ放送中止事件」（松田・メディア総合研究所1994）にベ平連絡みのものが含まれていることを見ても、この時代のテレビと社会運動の近さ、それを許容するテレビ業界の隙間の大きさを示していると思われる。

(10) ベ平連による米紙への新聞広告カンパにおいて、開高はかなりの貢献を果たした。にもかかわらず、60年代末までには開高は運動を離れ、またベ平連についての議論の中で言及されることも必ずしも多くない。この開高の問題は、ベ平連の「限界」を考える際に極めて重要だと考えるが、本稿の範囲を超えるため別稿を期したい。この点については吉川勇一へのインタビューも参照のこと（吉川2007）。

びその後継集団のことを指すとされている（小島 1987, 大嶽 2007 など）。しかし、「1968 年」の運動を論じた小熊英二も注で触れているように、1970 年前後までこの語は、上に述べたようないわゆる「新左翼党派」のことを意味していなかった（小熊 2009：985）。実質においても、かれらは、レーニン主義への「原理主義」的回帰を目指す古典左翼だった（栗原 1999）。

では、「新左翼」とは 1960 年代において何を意味していたのか。それは「ニューレフト」の訳語であり、その「ニューレフト」とは、60 年代前半までは、イタリア共産党の路線に影響を受けた、先進国革命論に代表される構造的改良派（あるいは構造改革派、以下「構改派」と呼ばれる政治潮流のことを意味した⁽¹¹⁾）。構造改革論と言えば、江田三郎を押し立てた日本社会党内の路線争いの印象が強いが、元々は、1950 年代後半に生じた日本共産党内の理論・路線闘争だった。以下、「原理主義」的古典左翼の革命党派を俗称に従い「新左翼」、国際的対比に即した場合を「ニューレフト」と呼ぼう。

この 50 年代共産党内の構改派は、理論においても集団においても一枚岩の存在とは言いがたい。むしろ、当時の共産党中央の、「民族解放民主革命」論への反発・対抗を軸に構成されていた（勝部 1972：239）。この点は、「構改派系」として括られる集団内部に、理論的方向性からすれば異なる要素を抱え込ませることに繋がった。

いずれにせよ、共産党内構改派の存在の指摘は、1960 年前後に「共産党（代々木）系」と括られていても、実は激しい内部対立が存在し、党中央とその反対派とは同列に論じることとはできないということを意味する。しばしば、旧左翼（日本共産党）との対決という図式の下で、「新左翼」の存在が意義づけられてきたが、構改派（＝「ニューレフト」）という党内反対派を「発見」することは、この通俗的な理解を揺るがす⁽¹²⁾。

「新左翼／ニューレフト」をめぐる位置づけ直しは、稿を改めてもう少し精緻に論じる必要がある⁽¹³⁾。ここでは「政治集団」の問題に話を戻す。ベ平連における「政治集団」は、この共産党中央への反対派の一角を構成していた。もっとも、武藤一羊も慎重に述べているように（武藤 2009：129）、かれら全員が、理論において必ずしも構改論者であったとは限らない。しかし党中央反対派という意味では、広義の構改派潮流に確実に含まれていた。実際に共労党は、統一社会主義同盟（統社同）系の運動とともに、日本の構改派の一潮流として整理される（勝部 1972：258）。

こうしたベ平連における「政治集団」の系譜は、次のような理解に結びつく。

まず、先にも述べたとおり、かれらはバラバラな一匹狼として偶然ベ平連に参加したというより、ある程度まとまった運動潮流として関係を持った。そうでなければ、「政治集団」が共労党にのみ結集するという事態は不自然であっただろう。そもそも 1960 年代全体を通じた共産党の勢力自体、「新左翼」に比して侮り難いものであったが、1960 年代以降にその共産党から順次排除された党中央反対派もまた、一定の政治勢力を有していた。

(11) たとえば、「構造改良」論を整理した著作の中で勝部元は、「イギリスのニュー・レフト・グループ」について、ヨーロッパ諸国における「典型的な構改派の出現」として位置づけている。

(12) 60 年安保闘争における全学連反主流派の位置づけの問題は典型的だ（松井 2009a：133）。

(13) ちなみに、「ニューレフト」の国際比較（油井編 2012 など）も、そもそもの概念の整理、その対応物の再検討を適切に行った上でないと、妥当な結論に至ることはできない。

しかも、かれらの理論が、厳密な意味で構改論ではなかったとしても、「陣地戦」(グラムシ)への視点を持ったものだったことは、ベ平連との関係を成立させるのプラスに作用したと思われる。これがもし、共産党中央の「民族解放民主革命」論の信奉者であったり、それを古典マルクス主義から批判しようという立場(「新左翼」)であったならば、「市民運動」との衝突は免れないし、逆に衝突を回避したならば、ベ平連の運動論も変質を余儀なくされたであろう。

もっとも、構改派潮流全体でないのはもちろん、共労党も、全員がベ平連に参加していたわけではない。あくまで個人として「政治集団」はベ平連に参加した。かれらの多くは、60年代に入っても引きずった共産党経験の中で、党の引き回して大衆運動が混乱・弱体化させられる歴史を、当事者として味わってきた。そのため、ベ平連内においては「フラクション活動」(大衆運動内部での党組織活動)は行わなかったという(栗原2006:22)。結果的に言えば、かれらは、「左翼」としての理論や経験とともに、その歴史的教訓をも、ベ平連に持ち込むこととなった。

以上見てきたとおり、ベ平連とは、小田の表現を借りれば、「マジメ市民」・「インチキ市民」・「政治集団」という「3者がからみあいこんがらがりながら」成立していたものだった。この3者は、それぞれに1960年代までの歴史を背負い、相互に別種の運動的可能性を保持した集団だった。ベ平連を捉えるために、「1968年」ではなく「1960年代」の幅で見ることがあるということ、ここまでの議論で示せたであろう。

3 「市民運動」の歴史的位罫

それでは、こうして成立した1960年代の「市民運動」とは、果たして何であったのだろうか。

ベ平連が「市民運動」だったのは、何より、その呼びかけ対象であり行動主体を「市民」と名指したからだ。ベ平連結成につながった最初のデモ(1965年4月)で配布された、有名な呼びかけ文がある。

私たちはふつうの市民です。／ふつうの市民ということは、会社員がいて、小学校の先生がいて、大工さんがいて、おかみさんがいて、新聞記者がいて、花屋さんがいて、小説を書く男がいて、英語を勉強している少年がいて、／つまりこのパンフレットを読むあなた自身がい、／その私たちが言いたいことは、ただ一つ、「ベトナムに平和を！」(ベトナムに平和を！市民連合編1974:6)

小田実の手によるこの文章の「市民」には、結局あらゆる個人が含まれる。ただし、先に見たように「市民」は「その他」であり、既成勢力の手垢にまみれたカテゴリーを拒否するという点では、単なる「あらゆる個人」ではない。いわば新しい主体の形成、過去の運動との違いを生み出す

ための呼びかけだった⁽¹⁴⁾。

とはいえ、既に見たようにベ平連は、個人がバラバラに集まって全く新しい運動を形成した、というものではなかった。過去の歴史を背負った3つの流れが絡み合って成立していた。では、ベ平連のこうした成り立ちは、「市民運動」としてのベ平連に何を持ち込むことになったのか。

このことを考えるのに、特に脱走兵援助活動の事例が興味深い。1967年に米空母イントレピッド号から4人の米兵が脱走し、かれらを密出国させることに成功したことから大々的に開始されたベ平連の脱走兵援助活動⁽¹⁵⁾は、それ自体注目に値する。ただし、その活動については既に当事者たちによってまとめられており（関谷・坂元編1998、高橋武智2007）、本稿ではその点の詳述はしない。むしろ、先の「3者」がそれぞれの強みを生かした事例として、脱走兵援助活動を見たい。

最初の脱走兵4人の存在は、既に当人たちがソ連船での国外脱出を果たした後に行われた記者会見によって世間に明らかにされ、そこで、かれらのスピーチを収録した映画フィルムが上映された。言うまでもなく、映画撮影の機材や技術は、「インチキ市民」の人脈から迅速にもたらされた。

そして、これ以降出てくる脱走兵を匿う過程で、「秘密活動」の協力者が求められる。多くが「一般家庭」に匿われたと証言されているとはいえ、「政治集団」の、特に1950年代の共産党非合法時代の経験者の「技術」（尾行対策など）と人脈が、ここで生きたことは疑い得ない（栗原2006：44）。また、脱走兵をソ連経由で逃すことをソ連側と交渉できたのも、交渉にあたった吉川勇一が共産党時代に平和委員会の活動家だったという経歴は無視できない（鶴見・上野・小熊2004：370）。

もとより、「マジメ市民」的な心情なしに、脱走兵援助は成立しえない。自分は仕事や家庭を持っていて学生のように派手な街頭行動はできない。したがって、「生活」は続けながら、それでもベトナム反戦に具体的な援助をしたい。そういう思いを抱いた人たちの堅実な協力によって（それだけではないにしても）、脱走兵は匿われた。

このように、脱走兵援助活動は、ベ平連こそが持つ「強み」が、存分に発揮された事例だったように思われる⁽¹⁶⁾。もちろん、「3者」がバラバラのままでは、そもそも約10年間のベ平連の活動を

(14) 2011年のスペインの「オキュパイ」運動であった15M運動における、以下の呼びかけ文（英訳）を見ると、半世紀前のベ平連との類似に驚く。新しい主体に呼びかけ、運動を始めようとする際の、共通のスタイルだと言えるのではないか。逆に言うと、「市民」も呼びかけられた主体概念として捉え直す必要がある。

“We are ordinary people. We are like you : people, who get up every morning to study, work or find a job, people who have family and friends. People, who work hard every day to provide a better future for those around us.” (Gerbaudo 2012 : 82)

(15) ベ平連とは別団体の「ジャテック」（「反戦脱走兵援助日本技術委員会」等と訳されるが確定せず、むしろ「略称」のJATECが正式名称と言える）が中心を担ったとされるが、実質的にはベ平連の活動の一環であり、本稿ではそのように記述する。

(16) もちろんここに、ベ平連の中心メンバー（「内閣」と通称された）たちの高学歴（東大卒・中退が多数）や英語能力といった、当時希少な「資源」が最大限発揮されたことも見ることができる。また「内閣」はほぼ男性であり、そこに時代の限界もあった。

維持することはできなかつたろう⁽¹⁷⁾。「3者」が絡み合っていること自体、そしてその絡み合いのあり方、そこにベ平連の歴史的個性が表現されていると言えるのではないか。

これまでの、マルクス主義に強く影響された歴史整理や社会運動史上の位置づけにおいて、ベ平連＝「市民運動」は「中間的」な評価がされがちだったように思われる。すなわち、一方で、旧左翼の側からは、共産党を除名されたような不屈きな人間を含んだ、「新左翼」とも共鳴する不適切な運動とみなされた。他方で「新左翼」の側から見ても、「市民」や構改派などという「生ぬるい」勢力によって構成された存在だった。左翼運動の視角からすると、どちら側から見ても中途半端、ということだったろう。

逆に、マルクス主義を自明視しない立場、すなわちマルクス主義の限界が露呈し、「市民運動」の時代へと転換していったという見方からは、ベ平連は左翼から切断された「市民運動」の元祖として、高い評価を与えられることになる。

本稿は、これらとは異なる理解を行う。まず、「市民運動」と左翼を切り離すのは、これまで述べてきたように、ベ平連の実態に照らして妥当ではない。理論としてのマルクス主義についてはともかく、運動や人脈の蓄積という点で、「市民運動」が過去の左翼ときりはなされた全く新しい地層に成立したものとは考えるべきではない。

とはいえ、その「左翼」は、旧左翼と「新左翼」の二者択一で名指せるものではなかった。両者の狭間に、忘れられた「ニューレフト」として、(広義の)構改派が存在していたことを、本稿は再発見した。もちろん「狭間」という意味で、構改派が「中間的」だったのは疑い得ない。しかし、それは旧来のマルクス主義の座標軸を自明の前提にした指摘であって、ここに、そもそもマルクス主義は妥当なのか、それを離れた運動論は成り立ち得ないのか、という当たり前の疑問を挿入すると、「中間的」であることは必ずしもマイナス評価にはならない。

これまでの議論を総合すると、ベ平連とは、高度成長を背景として、守るべき「生活」を背負った「マジメ市民」と、発展する娯楽文化産業を出自とする「インチキ市民」と、その高度成長にマルクス主義が対応を迫られて生まれた構改派の「政治集団」が、日米安保(1960年と1970年)とベトナム戦争の時代に、それらへの抵抗を通じて1つの結晶と化した、「1960年代」を象徴する存在だったと言えるのではないか。そうだとすると、これは「中間」というより、むしろ「中心」というにふさわしい。マルクス主義も既存の「市民運動」史観も前提としないで、時代に最大限向きあおうとすること、その「自立」した姿勢が「市民運動」だったと言えるだろう。

では、こうした「市民運動」は、グローバルに見たときにどう位置づけられるのか。これこそ「ニューレフト」だったのではないかと本稿は考える。

先に構改派に当てはめた「ニューレフト」は、イギリスの「ニュー・レフト・レビュー」に由来するもので、これはいわば「ニューレフト」の前期であった。それに対して60年代半ば以降に普

(17) ベ平連は1974年に自発的に解散しており、「分裂」を経験せずに済んでいる。とはいえ、このことは、ベ平連内に何の対立もなかったことを意味しない。たとえば、1969年の「反戦のための万国博」(ハンパク)をめぐる「大論議」において、「マジメ市民」と「インチキ市民」の運動観の対立が露わになった。小田実が、かなり長い字数を割いてこの問題を「回顧」していることから明らかなおり(小田1995)、ベ平連の「市民運動」観を考えるにあたって軽視できない対立だった。ただし本稿では紙幅の関係もあり、ここでは対立の存在を指摘するにとどめる。

及した「ニューレフト」は、アメリカの学生運動をイメージの源泉としていた。これは後期の「ニューレフト」と呼べるだろう。

後期「ニューレフト」は、「『反』エスタブリッシュメントの態度」や「組織原理そのものの対抗」を目指すものと当時分析されていた（高橋徹 1968：84-6）。これは言うまでもなく、日本の「新左翼」党派とは全く異質だ。むしろ、「組織ではなく運動」と称したベ平連と重なる。実際、ベ平連は、アメリカの「ニューレフト」の同時代の紹介者であり、人的にも交流を果たしている（たとえば1966年にはハワード・ジン、ラルフ・フェザーストンを日本に招き、全国講演旅行を行っている）。「ティーチイン」や非暴力直接行動も、ベ平連が当時のアメリカの運動から日本にもちこんだものだ。

「ニューレフト」の国際比較を行うのであれば、「新左翼」党派ではなく、むしろベ平連こそがその対応物だったのではないか。こうした指摘は、ベ平連を単なる「中間」派左翼として見る見方では見えてこないし、「市民運動」と規定するだけでも浮かび上がらない。「1960年代」という時代の中で、どこから来てどこへ行こうとしたかという点を分析しなければ、見落としてしまう問題だろう。本稿がこだわったのはこの点だった。

本稿では、ベ平連が「どこから来たか」ということ、それが成立させた「市民運動」が何だったのかということを議論した。では、ベ平連はどこへ進んだのか。ベ平連は1974年に解散しており、それが消滅したのは自らの意図に基づくものだった。しかし、ベ平連と「1960年代」の関係を強調してきた本稿の視座からすれば、では歴史としての「1960年代」はどのように終わり、変化していったのか、それによってベ平連によって示された「市民運動」はどうなったか、という「終わり方」の問題も解明されなければいけないだろう⁽¹⁸⁾。この点は今後の課題としたい。

（まつい・たかし 武蔵大学社会学部准教授）

【文献（日本語）】

- 阿奈井文彦（2000）『ベ平連と脱走米兵』文藝春秋（文春新書）。
- 天野正子（1996）『「生活者」とはだれか：自律的市民像の系譜』中央公論社（中公新書）。
- 梅崎透・西田慎編（2015）『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」：世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房。
- 大嶽秀夫（2007）『新左翼の遺産：ニューレフトからポストモダンへ』東京大学出版会。
- 小熊英二（2009）『1968 上：若者たちの叛乱とその背景』新曜社。
- 小田実（1979）『何でも見てやろう』講談社（講談社文庫）。
- （1995）『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館。
- 勝部元（1972）『構造改良：先進国における社会主義への道』潮出版社（潮新書）。
- 栗原幸夫（1999）『「新左翼」は本当に新しかったか』大藪龍介ほか編『新左翼運動40年の光と影』新泉社。
- （2006）『未来形の過去から：無党の運動論に向けて』インパクト出版会。
- 声なき声の会編（1962）『またデモであおう：声なき声の二年間』東京書店。
- 小島亮（1987）『ハンガリー事件と日本』中央公論社（中公新書）。

(18) 別の言い方をすれば、本稿が論じたベ平連は、主に約10年間の活動の前半部にあたる。では、1960年代末から70年代にかけて、ベ平連の何が変わり、何が変わらなかったのか。そのうちで何が引きつがれるべきで、実際に続いたのは何か。本稿ではそうした点を十分議論できていない。

- 小中陽太郎 (1973) 『私のなかのベトナム戦争：ベ平連に賭けた青春と群像』 サンケイ新聞社出版局。
 —— (2008) 『市民たちの青春：小田実と歩いた世界』 講談社。
- 小林トミ (1960) 「“声なき声” の行進」 『思想の科学』 1960年7月号。
- 関谷滋・坂元良江編 (1998) 『となりに脱走兵がいた時代：ジャテック、ある市民運動の記録』 思想の科学社。
- 高橋徹 (1968) 「アメリカ新左翼における「組織と人間」」 『現代アメリカ知識人論：文化社会学のために』 新泉社, 1987年。
- 高橋武智 (2007) 『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……：ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』 作品社。
- 高島通敏 (2004) 『市民政治再考』 岩波書店 (岩波ブックレット)。
- 鶴見俊輔 (1974) 「ひとつのはじまり：あるいはベ平連以前」 (ベトナムに平和を！市民連合編 1974)。
- 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二 (2004) 『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』 新曜社。
- 原彬久 (1991) 『日米関係の構図：安保改定を検証する』 日本放送出版協会 (NHK ブックス)。
- 平井一臣 (2005) 「戦後社会運動のなかのベ平連：ベ平連運動の地域的展開を中心に」 『法政研究』 71 (4)。
- ベトナムに平和を！市民連合編 (1974) 『資料・「ベ平連」運動 上』 河出書房新社。
- 松井隆志 (2009a) 「六〇年安保闘争とは何だったのか」 岩崎稔ほか編 『戦後日本スタディーズ②「60・70」年代』 紀伊國屋書店。
 —— (2009b) 「「市民」概念の歴史的再検討」 『ソシオロジスト』 11号。
 —— (2014) 「運動のつくり方の知恵：ベ平連・鶴見俊輔・プラグマティズム」 『現代思想』 2014年11月号。
- 松田浩・メディア総合研究所 (1994) 『戦後史にみるテレビ放送中止事件』 岩波書店 (岩波ブックレット)。
- 道場親信 (2005) 『占領と平和：〈戦後〉という経験』 青土社。
- 武藤一羊 (2009) 「花崎皋平さんとの交流を軸に運動史をふりかえる：「共労党」・「ベ平連」そしてその後」 『季刊 運動〈経験〉』 第28号。
- 矢崎泰久 (2005) 『「話の特集」と仲間たち』 新潮社。
 —— (2014) 『残されたもの、伝えられたこと：60年代に蜂起した文芸者列伝』 街から舎。
- 油井大三元編 (2012) 『越境する1960年代：米国・日本・西欧の国際比較』 彩流社。
- 吉川勇一 (1990) 「訳者あとがき」 (Havens1987 = 1990)。
 —— (1991) 『市民運動の宿題』 思想の科学社。
 —— (2007) 「ベ平連の経験と共同行動の論理：開高健問題から反改憲運動まで」 『季刊 運動〈経験〉』 第23号。
- 吉川洋 (1997) 『高度成長：日本を変えた6000日』 読売新聞社。

【文献 (英語・翻訳)】

- Havens, Thomas R. H. (1987) *Fire Across the Sea: The Vietnam War and Japan 1965-1975*, Princeton University Press (= 1990, 吉川勇一訳 『海の向こうの火事：ベトナム戦争と日本 1965-1975』 筑摩書房)。
- Kurlansky, Mark (2004) *1968: The Year that Rocked the World*, Random House (= 2008a-b, 来住道子訳 『1968 世界が揺れた年 上下』 ヴィレッジブックス)。
- Gerbaudo, Paolo (2012) *Tweets and the Streets: Social Media and Contemporary Activism*, London: Pluto Press.